

CONTENTS

巻頭言	1
活動報告	2
エネルギー一点描	4
投稿	6
お知らせ・編集後記	7

21世紀の エネルギーを 考える会・みえ



巻頭言



会長 小菅 弘正

日本は、世界の主要先進国の中でエネルギー自給率が最も低く、約4%となっております。一方でエネルギーの消費は世界で4番目の消費国です。日本は、このエネルギーの元となる天然資源を、世界各国から安定的に調達し、様々な産業で利用しています。

石油については中東から、石炭は、オー

ストラリアや中国から、天然ガスは、インドネシアやカタールなどからリスクを分散し調達しています。

石油においては、原油価格が1バレルあたり100ドルを突破し、10年程度で5倍に跳ね上がっています。原油の価格高騰は、経済へのダメージも大きく、企業の収益に大きく影響が出ることが予想されます。

日本は、2度のオイルショックを経験し、石油への依存度を緩和するため天然ガス、石炭、原子力、新エネルギーなどを利用してきました。

とりわけ、天然ガスについては、石油代替エネルギーとして早くから積極的に利用してきました。

現在、この天然ガスは、中国やインドなど経済発展のめざましい国において、需要が増加しています。

また、欧米でも環境対策として石炭から天然ガスへの移行するため需要が高まっております。

天然資源は有限であり、石油があと約40年、天然ガスが約60年とも言われております。

次代を担う子供たちへのためにも、代替エネルギーとして、更なる新エネルギーの普及や新エネルギーの課題である効率よく安定してエネルギーを得るための開発を早急に行わなければなりません。

また、天然資源の枯渇懸念や地球温暖化防止の観点から、欧米では原子力の利用が見直されております。

日本においてもこの取り組みは急務であり、当会は、この必要性を訴えていきたいと思っておりますので、ご支援とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年度 省資源・省エネルギー あしたのまち・くらしづくり三重大会が開催

2月19日(火)、津市ポルタ久居市民ふれあいセンターにおきまして、「平成19年度 あしたのまち・くらしづくり三重大会」が開催されました。

本大会は、県内の女性で構成される「三重県新生活運動推進協議会(会長伊藤幸子さん)」の主催で実施されたもので、「21世紀のエネルギーを考える会・みえ」はこの大会を後援しました。

はじめに主催者を代表して、伊藤幸子会長が挨拶され「地球温暖化が進み、各地で異常気象が発生している。また、石油資源が40年位で絶たれてしまいその中、私たちが身近な取り組みとして、レジ袋の削減や省エネが必要である」と述べられました。

続いて来賓を代表し、当会の中村信夫事務局長が挨拶し、「最近原油高がすすみ企業や消費者に大きなダメージを与えている。石油代替エネルギーとして、また地球温暖化防止の観点からも原子力発電の有効利用が必要不可欠であり、将来のためにも、今積極的に推進していく必要がある」と述べました。

その後、基調講演として、株式会社日本総合研究所副主任研究員の松井英章氏を講師に「新エネルギーの最前線～地球温暖化をどう防ぐか～」をテーマに90分にわたりご講演をいただきました。

松井氏は講演の中で、「地球温暖化がもたらす影響として、異常気象や伝染



■ 挨拶をされる伊藤幸子会長

病の流行、食糧難が発生するとともに、生態系の破壊など極めて深刻な影響が生じます。温暖化の原因としては、二酸化炭素をはじめ、メタンやフロンなどの温室効果ガス濃度の上昇であり、特に二酸化炭素の濃度については、数十万年の歴史の中で、ここ数十年が急激に増加しています。

地球温暖化を防止するためには、温室効果ガスの排出量の削減が必要ですが、例えば平均気温の上昇を2℃以内に抑えるには、二酸化炭素濃度を550ppm以内にすることが必要であり、このためには2050年までに、温室効果ガスの排出を半減する必要があります。温室効果ガスを減らす手段としては、第一の手法としては、皆さんが常日頃取り組んでいる省エネルギーです。

また、二酸化炭素を地下に埋め込んでしまうという大胆な方式も研究されています。中長期的には、二酸化炭素の排出をしないエネルギーの利用が重要で、代表的なものとして太陽光、風力などの自然エネルギーと原子力発電です。自然エネルギーは、

二酸化炭素を排出しないクリーンエネルギーであるが、安定してエネルギーを得ることができない。

これを解決するため、蓄電池を導入して平準化していく試みが進んでいる。」と述べられました。

午後からは、「環境問題」「子育て支援」「高齢者支援」「食育」をテーマに分科会が行われ、「環境問題分科会」に、中村事務局長が参加しました。分科会は、鈴鹿市生活学校の北川さんの司会により進められ、身近な省エネ・温暖化対策についてディスカッションを行いました。

参加者は、私たちの取り組みとしては、スーパーなどで配布されるレジ袋の削減をするため、買い物時にはマイバックを持っていくようにしている。しかし、マイバックが定着するためには、消費者としてどのように取り組むべきかなどが議論されました。

助言者として参加した中村信夫事務局長は、「家庭での省エネは主婦のみならず皆さんが常日頃から行っていますが、若い世代にも物の大切さも含めて継承していく必要があります。」

また、温暖化防止は、国や企業の取り組みも行っており、エネルギーの効率的な利用や二酸化炭素を排出しない新エネルギーや原子力発電の有効利用も進められています。」と述べました。



■ 環境問題分科会では、活発な意見が出た

■ 講演会

2月7日(木)、四日市市文化会館におきまして、「環境問題の真実を学ぶ講演会」が開催され、約200名が参加しました。これは、「社団法人四日市青年会議所」主催で2月度例会として実施されたもので、当会は、この講演会を後援しました。

講師に武田邦彦氏をお招きし、「環境問題の核心を衝く」～無知は環境問題を

悪化させる～をテーマに、「リサイクルは本当に効率が良いのか?」「京都議定書の真の目的は?」「資源の枯渇、代替エネルギーとは?」など様々な視点から環境問題についてご講演をいただきました。



■ ご講演中の武田邦彦氏

■ 見学会

12月8日(土)、「富士通労働組合三重支部」を対象に「中部電力浜岡原子力発電所」見学会を開催しました。

当日は、27名が参加。浜岡原子力館アテンダントスタッフの案内で、浜岡原子力館の実物大模型や発電所構内、運転訓練シミュレータを見学しました。

参加者は、設備に対する安全への配慮が十分に成されている事や安全作業のために日頃から訓練を行っていることに関心を持たれていました。

また、9月27日(木)から28日(金)には、「三重一般同盟労働組合」16名を対象に、中部電力川越火力発電所とへきなんたんピアの見学会を実施しました。



■ 富士通労働組合三重支部のみなさん

■ 研修会

平成19年度は、小規模の研修会として、出前講座を実施いたしました。

内容としては、「環境とエネルギー」と題し、近年問題となっている地球温暖化の仕組みやそれを防止するためには、国や企業はどのような取り組みが必要か?また、1人ひとりはこの問題に対し、どのような取り組みを行う必要があるかなど、スライドを使って説明しました。

身近な省エネの秘けつなどの紹介もあり、婦人層に興味を持っていただきました。

また、講演後には、環境に少しでも寄与していただくため、ガーデニング教室や苔玉作り教室(材料費は一部自己負担)を開催しました。

開催日：平成19年10月19日(金)
場 所：四日市商工会議所ホール
テーマ：「環境とエネルギーについて」
参加者：四日市商工会議所女性部20名

開催日：平成19年11月21日(水)
場 所：朝明商工会館
テーマ：「環境とエネルギーについて」
参加者：朝明商工会女性部40名

開催日：平成19年12月6日(木)
場 所：津北商工会館
テーマ：「環境とエネルギーについて」
参加者：津北商工会女性部36名

開催日：平成20年2月20日(水)
場 所：四日市市中部地区市民センター
テーマ：「環境とエネルギーについて」
参加者：四日市消費者協会35名

開催日：平成19年8月8日(水)
場 所：四日市シティホテル3F
テーマ：「環境とエネルギーについて」
参加者：四日市南ロータリークラブ30名



■ 平成19年10月20日伊勢新聞より抜粋

原子力発電所の地震に対する備え

昨年7月16日に新潟県中越沖地震が発生し、東京電力柏崎刈羽原子力発電所が、被災しました。この地震により同発電所では、発電中のプラントが自動的に緊急停止しましたが、屋外変圧器の火災や放射性物質の漏洩が発生し、テレビや新聞で大きく報道されました。

当会としましては、平成8年の設立から「環境と調和したエネルギー源の確保」を活動理念とし、新エネルギーや原子力発電の有効利用等を訴えてきました。

今回は、原子力発電所の耐震対策についてご紹介させていただきます。

地震のメカニズムとしては、地殻(地球の表層)は、10枚ほどのプレートに分かれており、地球内部にあるマンツルの活動により、このプレートがずれることにより地震が発生します。

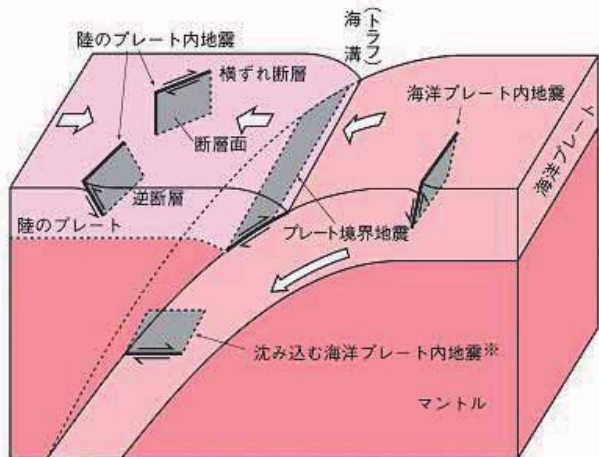
また内陸では、このプレートがぶつかり合うことにより内部の岩盤が壊れ、ずれることにより発生する地震もあります。

日本は近海に、ユーラシアプレート、フィリピン海プレート等など、4つのプレ



●地震のメカニズム

地震は発生原因によって、「プレート境界型」と「プレート内型」に大別されます。プレートの運動によって蓄積されたひずみのエネルギーがある限界を超えたときに、エネルギーを解放して地震が発生します。



※沈み込む海洋プレート内地震とは、いわゆるスラブ内地震のことでです。

トが交差しており、地震発生が多い国です。

原子力発電所では、地震に十分耐えられるための構造物を造る必要があるため、国の原子力安全委員会が定めた耐震指針にもとづいて設計されます。

この耐震指針は、ビルやマンションなどの耐震性を定める建築基準法よりも厳しい基準であり、この基準を満たした原子力発電所は、一般の建築物よりもはるかに頑丈で地震に極めて強い構造物です。

原子力発電所は、この耐震基準を満たすため強固な岩盤に原子炉を直接設置する、敷地内や近傍において活断層が無いことを調査したうえで、建設地を選定する、その地域で考えられる最大の地震を想定しこれに耐えられる設計とする、などの耐震性の高い設計をしています。

地震発生時には、原子炉を「止める」「冷やす」放射性物質を「閉じ込める」という安全上重要な施設は安全機能が維持されるように設計されています。

日本では、原子力発電所が運転を開始してから、約40年になりますが、地震による重大なトラブルはなく、耐震性に優れた建物と言われていました。

しかし、鳥取県西部地震や阪神淡路大震災をふまえて、原子力発電所の耐震指針が見直され、2006年9月にこれまでの指針に最新の知見を反映させた新しい指針が定められました。

この新しい指針では、原子力発電所の耐震安全性を高めるため、より細かな活断層の調査や地震の揺れを厳格に想定することを求めています。

現在、日本の電力会社は、新しい耐震基準に合っているか、評価をすすめています。

また、各電力会社において、今回の新潟県中越沖地震による柏崎刈羽原子力発電所の状況をふまえて①今回の地震で得られた観測記録の分析評価②周辺の地質調査③分析によって得た地震動により安全上重要な設備の耐震安全性評価④耐震安全性をふまえ必要な耐震対策を実施しつつあります。

さらに、地元の中部電力や関西電力では、耐震安全性の余裕を向上させるため、耐震裕度向上工事も実施しております。

なお、新潟県中越沖地震では、想定を超える揺れに対しても原子炉を「止める」「冷やす」放射性物質を「閉じ込める」という安全機能が正常に作動し、安全に停止しました。

しかし、その他の設備において、火災や微量の放射性物質漏れなどが発生しました。この教訓を踏まえ、各電力会社は防災体制の強化などの対策が講じられています。今後も大規模地震に対する余裕を持った備えで、更なる安全性向上を目指すことが求められています。

▶ 耐震裕度向上工事の一例

■ 排気筒改造工事



工事前

■ 支持鉄塔を設置



工事後



■ 配管サポート改造工事

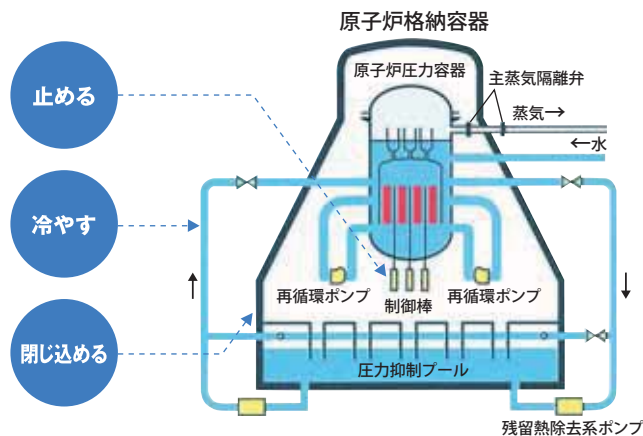


既設サポートの周囲
(赤色部)に部材を追加
しました。

既設サポート

配管

原子力発電所の地震に対する安全機能



- 止める** 地震による強い揺れを感じ、核分裂反応を起こす中性子を吸収する制御棒を自動挿入し、原子炉を安全に停止します。
- 冷やす** 運転停止後も、ポンプで水を循環させることにより原子炉内の温度を下げ、約30～40度まで冷やします。
- 閉じ込める** 原子炉圧力容器や原子炉格納容器などによって、放射性物質が原子力発電所の外部に出ないよう閉じ込めます。

私たちにできる温暖化対策

■ 四日市消費者協会 会長 中嶋 敦子

四日市消費者協会では、賢い消費者を目指し、様々なテーマで消費者講座などを開催しています。

2月20日には、「21世紀のエネルギーを考える会・みえ」のご協力により、「環境とエネルギー」と題し、研修会を開催しました。

研修会では、二酸化炭素やメタンガスなどの温室効果ガスの濃度が高くなることにより、大気保温効果が高くなり100年後には、地球の平均気温が1.4℃から5.8℃上昇すると予測されているとのことでした。

この影響で海面の上昇や異常気象の発生、農作物の減収による食糧難など、私たちにっては、悪い事ばかり起きることになるので、世界中の人がこの問題に真剣に取り組まなければならない



と思いました。

これまで、私たちは快適で豊かな生活を営むために、石油や天然ガスなどの資源をたくさん使い、二酸化炭素を排出してきました。

その量は、植物が吸収する能力以上であり、徐々に大気に蓄積され、少しずつ影響が出始めてきています。

日本は、優れた技術があり、原子力発電の有効利用や新エネルギーの開発導入など、国土は狭いが、積極的に取り組んでいると思います。

私たち消費者としては、この取り組みを理解したうえで、生活の中にも温暖化防止につながる事がたくさんあることを学びました。

誰もが、今日から取り組める温暖化防止策として、省エネルギーがあります。

省エネルギーの「省」は、「く」をつけると「はぶく」と読み、無駄なものを取り除く意味で、エネルギーの無駄を取り除くことでは、私たち主婦は日常生活の中で、自然に身につけていますが、研修では私たち主婦が気づかな



いエネルギーの無駄使いがあることや効果的な省エネルギー方法の紹介もありました。

家庭内の省エネだけでなく、自動車の運転にも気を配り、エコドライブや、アイドリングストップなども実践していきたいです。

環境とエネルギーについてのお話の後、もう一つの温暖化防止の取り組みとして、植物による二酸化炭素の吸収があり、この活動の一環として、ガーデニング教室も開催されました。

毎日、花の世話をする度に省エネルギーの事を思い出します。

最後に、省エネルギーの「省」は、「みる」をつけると「かえりみる」と読み、自分の行いを振り返る意味もあり、昔、母からまた叔母から習った生活の知恵を振り返り、その知恵を生かしながら、省エネルギーに努力していきたいと思います。

プレゼントコーナー

2月7日に開催された「環境問題の真実を学ぶ講演会」でご講演いただきました中部大学総合工学研究所教授・武田邦彦氏の著書『環境問題はなぜウソがまかり通るのか』(洋泉社)と『環境問題はなぜウソがまかり通るのか2』を「考える会」会員の中からそれぞれ5名に、プレゼントいたします。

ご希望の方は、はがきに郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の上、〒514-0004津市栄町3丁目248番地きりんセカンドビル302号、21世紀のエネルギーを考える会・みえ事務局「本プレゼント24号」係まで。締め切りは4月25日(当日消印有効)。たくさんのご応募をお待ちしています。



ホームページが完成しました

会員の皆さまにタイムリーな情報をお知らせするために、ホームページを制作いたしました。

ホームページには見学会、講演会などの活動内容や環境・エネルギーに関する記事、会員の皆さまにお知らせする内容などを掲載いたします。

たくさんの方のアクセスをよろしくお願いいたします。

ホームページアドレス

www.zb.ztv.ne.jp/e-mie21

活動

見学会、講演会などの活動内容を掲載します。

会員・企業紹介

環境問題やエネルギーの効率利用などに取組まれている会員・企業を紹介するコーナーです。

エネルギー点描

環境問題やエネルギーについての紹介をいたします。

会員ページ

会員限定の情報や投稿記事の書式、事務連絡用書式を掲載いたします。

会報誌

会報誌の最新号やバックナンバーをご覧いただけます。



お知らせ・編集後記

お知らせ

平成20年度総会のお知らせ

日時:平成20年6月5日(木) 13:00~16:00(予定)

会場:アスト津 4F アストホール

会員の募集

「考える会」では、会の更なる充実を図るため、引き続き会員の募集を行っています。

新世紀におけるエネルギー問題、環境問題等を共に考え、行動する人の「輪」を広げています。

未入会の企業、団体、一般の方で当会に興味がありましたら、一声お掛けいただきますよう、お願いいたします。

編集後記



次代を担う子供たちのために

事務局長
中村 信夫

「快適で住み良い地球環境を子孫のために残していきたい」という願いは、誰でもあります。

すでにご承知のとおり、日本で消費される電気の3分の1は、原子力発電によってまかなわれています。

原子力は太陽光や風力、水力と並んで、発電中における二酸化炭素の排出がないエネルギーです。

今、地球温暖化防止の観点から、二酸化炭素の排出量削減は、急務であり、安定して電力が得られる原子力発電に大きな期待がかかっています。

特に今年は、二酸化炭素などの温室効果ガス削減目標を定めた、京都議定書に示す、約束期間始まりの年でもあり、2012年の5年間で目標の温室効果ガス

6%削減に向け、具体的な取組を実施していかなければなりません。

また、日本の経済を支える石油は、1バレルあたり100ドルを超える高値となっております。

この石油も限りがあり、今のペースで使い続けると、あと40年程度と言われております。

このような状況の中、次代を担う子供たちのためにも、石油代替エネルギーとして、原子力発電の必要性をみなさんが認識いただき、導入に向け早急に対応する事が必要です。

今後とも「環境と調和したエネルギー源の確保」に向け、活動していく所存でございますので、より一層のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

COVER Photo



— 津城 (津市丸之内) —

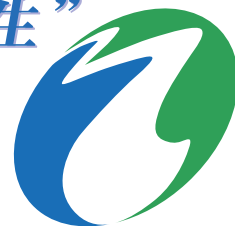
津城(別名・安濃津城)は、織田信包(信長の弟)が天正8年(1580)創築。慶長13年(1608)今治藩より築城の名手といわれた藤堂高虎が入城。近代城郭として大改修し、津藩の藩庁となった。江戸期の津城は中央に内堀で囲まれた本丸と、それに付属して東丸・西丸があり、本丸・東・西丸を取り囲んで二の丸が配された輪郭式の平城であった。

現在では、本丸・西の丸・内堀の一部を残すのみとなったが、復興された角櫓の三層の白壁に老松がはえ、苔むす石垣とともに昔を偲ぶことができ、春は満開に咲き乱れる桜を楽しむことができる。

2008年は藤堂高虎が津に入府して400年を迎え、1年を通じてさまざまな催しが予定されている。

シンボルマーク

“共生”



「みえ」のイニシャル“M”と自然のイメージをモチーフに、自然環境と暮らし、エネルギーの共生を表現しています。色は海のブルーと樹木のグリーン、図形は地球であり、「三重」の海と山、美しい海岸線でもあります。ダイナミックな“M”で、未来に向けて発展していくエネルギーの躍動感を表しました。

お問い合わせ先(事務局)

〒514-0004

津市栄町3丁目248番地

きりんセカンドビル302号

TEL&FAX(059)229-3790